

大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会
教養教育・共通教育検討分科会(第1回)議事要旨

- 1 日 時 平成 21 年 2 月 26 日(木) 15 : 00 ~ 17 : 00
- 2 会 場 日本学術会議 5 階 5 - C (1) 会議室
- 3 出席者 藤田委員、小林(傳)委員、塩川委員、増淵委員、松本委員、
森田委員、吉見委員、荻部委員、鈴木委員

(大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会)
北原委員長、高祖副委員長、広田委員

4 議 事

(1) 委員長、副委員長及び幹事の選出について

◇ 役員が以下のとおり選出された。

委員長：藤田委員、副委員長：小林(傳)委員、幹事：増淵委員

◇ 役員から挨拶があった。

藤田) 本分科会は、文部科学省の審議依頼を受けて学術会議に設置された親委員会(大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会)の下に設置された3つの分科会のうちの一つ。分科会の設置期限は8月31日までだが、5月か6月ころまでには成果を出すよう要請されている。メール審議等も含めてご検討いただき、5月ころにはそれなりのものをまとめたので宜しくお願いしたい。

大学進学率が55%に達している中で、そのカリキュラムや教育活動等も多様化しており、実務や資格に関わるものなど専修学校・各種学校と重なる要素も増えている。世界的に見ても、高等教育の在り方は拡大と同時に多様化が進んでいる。そういう中で、大学教育として、教養教育をどのように具体化・充実させていくのかが課題になっている。また、単に専門学校的な要素が入ってきているだけではなく、メディアの多様化、情報化が進み、コンピュータやインターネット等の新たなリテラシーの重要性も高まる中で、そうした新しい要素も含めて学部教育、教養・共通教育の現在と将来にわたる適切な在り方をどのように構想すればいいかということが、この分科会に課せられた課題だと考えている。

小林（傳））我々の分科会は教養教育・共通教育検討分科会ということで、概念の違うものをくっつけている。教養教育は教育の中身に関する話で出てくるラベルだが、共通教育は大学のカリキュラムの編成のときに使う言葉。そこをどう考えるか。教養教育は自動的に共通教育で、1、2年、あるいは学部・学士教育は教養教育だという取り方が一つあるが、教養教育は共通教育で行われることはあるが、共通教育以外のところで教養教育を行うことも可能というスタンスもある。結局は、教養教育と専門教育との関係という論点にかかわってくる。今回の答申の趣旨は、教養教育と専門教育という言葉の使い方を見直して、学士課程というスタンスで検討せよということなので、教養教育と専門教育を最初に立ててその接続を、という議論の立て方でいいのかという問題は根本的に残っている。この部分は整理していかなければいけない。

共通教育と教養教育はイコールではなく、仕分けが難しい。そういう意味では、共通教育という概念を我々がどう考えるかは大事な問題。教養と専門に関しては、専門教育を通して教養教育をすることは可能だが、たこつぼ化するという弊害がある。だが、教養と専門を分断することも問題。この辺りがこの分科会の一番根本のところ、これもいずれ整理する必要があると思っている。

増淵）教養教育の問題について、親委員会での議論やヒアリングを聞いて感じていたのは、今回も委員は国立大学の先生方が多いが、国立大学間にも差があれば、国立と私立の間にも教養教育の在り方の考え方自体に差があるということ。その辺をどのように交通整理していくか。もちろん、大学が主体性を持って取り組むことが大前提だが、ある一定の方向性を打ち出すと、現場ではそれに引きずられる面があると思っている。専門と教養とのつながりをどうするかということは悩ましいし、教養学部がある東大や京大の教養の捉え方は、おそらく日本の99%の大学では通用しない。その辺の議論の整理を考えていきたい。

もう一点は、会議をやればやるほど、我々が当初抱いていた大学というものから離れていっていると感じている。今の大学は本当に大学の名に値するのか。先生方が忙しいと、学生も忙しくなる。その中で学士力と言ったときに、教えることが中心の大学になっていくのか、学ぶことが中心の大学になっていくのか。教養教育という面で捉えたときに、大人数でやったり、単に一方的な知識の披露をしたりしているが、はたしてそれが高等教育の名に値する内容なのか。この点も非常に関心を持っている。

藤田）以上のようなことが、これまで親委員会で議論されてきたことの概要であり、また、この分科会に期待されていること。この分科会を含む親委員会の課題は、その質をどういうレベル・側面・方法で保証するのかということにあるが、その点については、最終的な結論が親委員会で出ているわけではない。私個人としては、例えば学士力といった形で何らかの測定をするといったことで

はなく、大学として、その名に値する質のサービスをどのように提供するのかというところで考えることが重要なのではないかと考えている。

この分科会に与えられた課題は、学士課程の教育、そのカリキュラムとして何を盛り込むべきかという共通の部分を検討することだが、その具体は非常に拡大しているように見受けられる。とはいえ、それらは単に横並びに拡大しているのではなくて、重層的でもあるので、そのコアとなるものを中心にどのように内容構成していくのが好ましいかを検討する必要がある。

もう一方で、ティーチングの側面、提供サイドだけでなく、学生の主体的学習という側面で捉えたときに、どのようなカリキュラム構成が重要なのかという、ラーニングの視点も含めて考えることが重要になると思う。

こういったところが前提になると思うが、それ以上のことはこれからこの分科会で検討することになるので、よろしくお願いいたします。

(2) 自由討議

小林（傳） 資料2の3. 「「教養」なるものの可能性」で問題提起をしている。

①学部：教養教育／大学院：専門教育という振り分けは妥当か。②citizenship を教育の現場でどのように実施するか。これが教養教育のコアになるべきなのかという問題。実際、大阪大学のアンケート調査ではこの部分に学生は全然反応しない。③科学技術リテラシーを社会でシビリアンコントロールするという課題。理系の学生も文系の学生も、様々な科学技術に対する理解が必要になる中で、どのような教養教育が考えられるか。④私の世代くらいまでは古典を読み新聞を必ず読むというのが普通の大学生だったが、今の40代以下の世代は、新聞を読まない。しかし、決して知的ではなくなったわけではなく、ネットを活用する等のメディアリテラシーを持っており、やはり教養があるといえる人が多数存在している。こういう状況なので、大学はメディアリテラシーをそろそろ取り入れてもいいかもしれない。⑤従来のティーチングや研究室に所属することによる徒弟制のラーニングではない形のラーニングを大学の教養教育の中で培うことに関する問題。

○ 世界中の大学が悩んでいることだと思うが、どのような取組をしているかということに関する議論は既になされているのか？

藤田）親委員会では、教養教育関係については小林（傳）先生と私が報告しただけ。私の報告については、資料4に出ているが、アメリカの動向を中心に紹介している。イギリス QAA に関することや、デアリングレポート以降の展開、ボローニャ・プロセスなどヨーロッパの改革動向についても報告・検討がなされてきた。また、今2週間ほどかけてイギリスに調査に行っているが、その報告

が間もなく行われる。

小林先生と私の親委員会（第4回、平成20年12月19日）での報告の詳細は学術会議のHPに掲載されている議事要旨をご覧くださいと思いますが、補足させていただく。資料4の5ページ、上のスライドで、アメリカの大学における学部教育改革の変遷と特徴を紹介している。大まかな傾向としては、教員の世代が代わると改革をしていて、その改革は振り子のように右から左へ、左から右へと揺れ動いてきたことと、時代の変化に対応して新しい要素がその都度付け加わってきた点に特徴がある、と言ってよいと思う。新しく付け加わってきたものとしては、情報リテラシーなど新しいリテラシーという要素と、論文の書き方やその基礎となる文章トレーニングなども含めて知的探求のための基礎的トレーニングが重視されてきているという印象がある。また、市民性や異文化理解といった、多様な異なるカルチャーを経験することで培われる教養も強調されるようになっている。

下のスライドは、ハーバード大学の95年のカリキュラム改革レポートを中心にまとめたものだが、教育目的として「知的教養」「市民形成」「人間形成」という3つの側面と概念が重視されている。とはいえ、これら3つの要素をどう具体化するかという点での考え方は多様で、大学によっても違いがあり、また、時代によって揺れてきたという感じがする。

- 国内でも大学によって多様性がある。それを全体的にくくるフレームがあるのかわからないが、縦と横の調整をどうするかという問題が一つある。もう一つは、技術リテラシー、ネット時代の知的・アカデミックな能力はどういうものなのかという問題。それから、大学がどのように学生の品質保証をするのかという問題がある。

縦と横の問題については、例えば東大では、学科単位で縦に分かれている学部後期課程で、部局横断の新しいシステムが始まった。今後全学的に広がっていくと思うが、横断型のプログラムと学科ごとの縦のプログラムがフリクションを起こさずに相乗的に効果を挙げるデザインについて議論している。

また、技術リテラシー等、ネット社会における学問知は大変重要なので、学生がそれを使いこなしながら学問の世界の知識の地図を描いていく力をいかに身につけさせるか。この取組は、大学の中でも既に始まっている。

社会に関しては、学生にとっては、キャリアパスが見えないところが多く、意欲を喪失している部分もあるので、社会はこういう能力を持った人を必要としているということを学生にわからせる仕組みも必要だと思う。

- デジタル時代のリテラシーと言うときには、レポートのネットからの引き写しなど、いわゆる情報の使い方の問題では話は終わっていないと思う。教養の市民性については、ヨーロッパの教養市民層が、産業社会が立ち上がる中で養

成されてきたことから考えると、今のデジタルネイティブと呼ばれる世代は、いかに情報をジェネレートするかということが求められている。インターネットにつながることは、グローバル市民と言っているような振る舞いができるというところまで理想に組み込まれているので、インターネットを使いこなせるということが、かつての教養市民層のような教養を身につけるということなのかもしれない。しかし、日本はどちらかというとジェネレートの部分が弱い。情報の単なる消費者ではなく、ジェネレーターとしてどのようにテクノロジーやインターネットと関わっていくのかを考えないといけない。しかし、日本には特殊な事情もある。インターネットを使うときは携帯が中心である一方、相対的にデジタルディバイドが少ないといった日本の状況に合わせて情報をジェネレートしていくような振る舞い・態度を念頭に置かなければいけないと思う。

- 共通教育ということで考えると、一つのモデルは数学だと思う。例えば理科を学ぶには数学は必修になる。他方、外国語は、教養の一環としてみなされる場合と全く実用的なものと考える、この二つが共存する状態にある。外国語と数学が共通教育であったというのは古い考え方なのか？あるいはこの問題は既により越えられているのか。外国語と数学が共通教育であったということではもたないのか。
- この分科会として定まった見解はない。外国語については、最近はコミュニケーション能力などが重視されているが、従来は、単に言葉の学習というよりも、実質的な内容のある文献が教養的な教材として選ばれていたと思う。そういう内容面での教養に元々入っていた部分に加えて、外国語の学習を通じて異文化理解等が育まれるとする見方も強まってきた。それらの要素のどれを重視するか、どういう要素が教養教育に含まれるのかについても、考え方は多様だと思うが、いずれにしても共通教育に含まれると思う。
- 数学や外国語は、例え教養ではないとしても共通教育になるという合意があるのかどうかは気になっている。分野におけるリテラシーの一番基礎になるリテラシーは言葉と数字、読み書きそろばんということではないか。その上に様々な分野のリテラシーが乗っているのではないか。
- 共感するところの多い話。私の世代では数学や第二外国語は教養基礎としての観点があったが、現在それは現実には通用しなくなったということが客観的事実。日本語の教育については、日本語の文章能力教育を初年次学習としてかなり多くの大学がやっているが、研究大学に近い大学でも理系の学生が文章を書けない。数学に関しても、昔の体系化された数学が今通用するとは思わないが、

逆に確率論や統計といったタイプの数学的知識は必須の教養になると思う。時代に合わせた数学の教養としての在り方は議論されるべきだと思うし、教養の中核に入るべきだと思う。

- 昨年ある雑誌が、新入社員から幹部まで読んでおくべき本をリストアップしたが、そこにはかつてなら必ず入っていたユダヤ関係の文献、ヨーロッパの古典、中国哲学がほとんど入っておらず、アメリカ由来の経営学が読めればいいとされていた。ヨーロッパのビジネスパーソンと話すときにキリスト教の教養があるとか、中国のビジネスパーソンと話すときに中国哲学の素養があるということが商談にも役立った時代がかつてあったとすると、今はどの国のビジネスパーソンと話そうが、英語でグローバルスタンダードに乗った話をすればいいということになってしまっているのではないか。このような現実に対して、そうした実地に使える英語を大学1、2年生でやらせるべきものなのか、それとも専門的なビジネス英語を教える機関に任せた方がいいのか、異文化理解も大事なのだという立場なのか、色々考え方があると思う。
- 資料4の5ページ、一般教育改革の教養人の育成にある「知的教養」「市民形成」「人間形成」は必ずしも大学でやる必要はない。社会全体でやるべきこと。では大学でやることにどのような意味があるかを考えてみると、共通教育の問題と重なってくところがある。例えば専門職大学院では、交渉術の授業を、シミュレーション等を含めて行うこともあるが、これは大学でやらなくてもいいのではないかという議論が出てくる。では、大学でやるならどのような特色を出すべきか。単に交渉のスキルだけでなく、理論的な背景を検討することや、価値判断をどのように加えていくのか、歴史的な経緯をどのように理解するかなど、幅広い視点から思考力を育てていくようなプログラムを考えないといけない。この辺に、かつて共通科目・教養教育科目の中心として外国語や数学があったという意味があると思う。これから教養教育・共通教育で外国語や数学を考えていく上でも、これまでとは少し違った形・側面で在り方を考えていくことで、プラスになるものは持続するのではないか。
- なぜ大学でやらないといけないかということに関連して、現在、家庭も地域も企業も教育能力を落としているということがある。また、人材育成に当たっては、社会の状況とも無関係ではなく、高度成長期にあったような教育と、少子高齢化が進み、働く人が減ってくる社会の中で必要になる教育は違うので、そういったことも考える必要がある。
- かつての語学や数学に相当するような、大学力の基盤になる教養ならざる教養とは何なのかというところに、明確な言葉を与える必要があると思う。例え

ば語学については、日本の学生はすごく内向き。単に英語が苦手なのか、語学の問題を超えた共通の知の基盤になるようなものが日本の学生から失われつつあるのかよくわからないけれども、昔の数学や語学ではないと思うが、それに代わる知力の基盤に言葉を与えて社会に認知させ、企業や人材のマーケット等受け皿になるところに説得力を持つような形で訴える必要がある。

○ こういうものに対する言葉がない。「新教養」と言ってみたがうまくいかない。先ほどの雑誌の話のように、最近はそのような方向に動いていると思うが、アメリカ由来のビジネスに対応した書籍だけではもたないということに気付く人が企業の中にはいると思っている。だからといって、カント・デカルトを読むということでもないが。カント・デカルトをなぜ読まないといけないかと聞かれると答えにくい、古典が大事だという感覚は必要。80年代くらいに古典の再定義が始まってきたと思うのだが、今はもっと定義の仕方を変えないといけないと思っている。

○ 古典のリストを変えるということと、古典という枠を認めなくなるということとは違う話。日本ではよく国際人の養成と言うが、これをフランス語にすることはできない。日本で国際人を養成すると言うと、世界の人たちと交わりたいというコスモポリタンの漠然とした考えと、スポーツ・ビジネスを含めた国際舞台に出て活躍するような日本の代表としての強烈的なナショナリズムがドッキングしている。

○ 2点申し上げたい。一つは、大学のシステムや制度にとっての教養という視点が必要なのではないかということ。具体的には、専門学校等の拡大や大学の就学率が50%を越えている中での教養はいかに語られるのかということが大前提だと思う。ここでの議論で重要なのは、専門学校等と大学は何が違うのか、大学教育の中でどのように基盤的能力等を育むか、いかに専門学校等とは違った質を保証しているかを社会に提示できるかということ。この場合、あるべき大学像を考えないといけないが、一方で現実の大学の中でどのような教養がありうるのかをポイントとして、更に考えていただければと思う。

もう一つは、数学や語学が学問の色々なところに通じるという話と、基盤的な能力や大学を出た後の話の2種類があって、専門基礎、大学での高度な学習につながる意味での教養と、大学を出た後の教養の2種類がある。その2種類をうまく串刺しにして教養を語らないといけない。広がっている大学における、中と外の両方を語る必要がある。その部分で、先ほど出た何らかの言葉を探すというところをぜひお願いできればと思う。

○ 今の高校教育では、ある種偏った範囲しか学ばない、高校に先生がいなくて

学べない学生が結構大学に入ってきているので、リメディアル、再学習・補習にどのように時間を割くかということが難しい。一クラスを形成したときにレベルがまちまちになってしまって、ある学生にとっては陳腐に聞こえるし、ある学生にとっては面白く聞こえる。そこが一般教育を教えている大学の先生にとっての悩み。また、学ぶべき知識体系が多くなっており、限られた時間の中でやるのは大変なので、大学の中で補強することが主な使命なのではないか。高齢化が進んでくると、再学習の意欲も強いので、現代人として知っておくべきことを補強するということも大学の役割だと思う。

- 知識の観点で教養を定義するときには、特に科学技術等の爆発的な進展によって、知識があっという間に陳腐化することがあるので、自分で知識を更新していくコンピテンスを併せて考えないといけない。また、読み書きのリテラシーは個人ベースで考えられるが、情報リテラシーや科学技術リテラシーは、個人の属性ではなく、社会やシステムの属性、組織単位で考える必要がある。一人ですべてのリテラシーを詰め込むことは無理なので、知の利用法や発信する能力を考えないと、知の爆発についていけなくなる。
 - 大学に入る人が増えており、その動機も多様化している中で、大学に至るまでの初等・中等教育を経た人たち、あるいは再教育に入る人たちに対して、大学教育・高等教育というスタート地点を前提に、何を教えられるか。あるべきものと、現実には4年や6年、9年という枠組みを与えられたときにできることのすり合わせを念頭に置かないといけない。現実問題としてどこまでできるか。
 - 2点申し上げたい。一つは、古典的なことは今の時代に合わないが大切だという話と、今の時代に大学が世界的・人類的課題に役立ていくためには何か提示しないといけないという話の二つのレベルがあるということ。おそらく両方必要だが、古い教養と新しい教養を混ぜるとわからなくなる。私は、新しい教養、新しい知は、あまり多くないという印象を持っている。学問や分野は細分化しているが、21世紀的・現代社会的に、大学の学部レベルで社会に対してこれが大事だと皆が合意できるものは、10に満たない程度ではないか。そうすると、そういうものを軸にする教養・共通教育の仕組みは、あるところに収斂していくのではないか。
- もう一つは、今日は内容の議論が多かったが、この分科会ではどういう内容で教養・共通教育を定義するかという話とともに、どういう仕組み・システムでやるかという話もある必要がある。今既にある大学の、ある程度学部学科で分かれているシステムの中で、どのように教養・共通教育を考えていくかという仕組みの話や、現状と目指すべきものの間のプロセス、インフラ、システムレベルの話も必要なのではないか。

高祖) 答申の 12、13 ページの「学士力」について説明させていただく。学士力とは、「学士」の学位を身につける人はどういう能力を持った人かということで、「知識・理解」から始まる 4 つの項目を挙げている。これは、世界的にも、卒業していく学生の質保証が注目されている中、大学が卒業資格を与えることは何に起因しているのかということについて、大学自身がもっと意識して考えるべきではないかということで始まった。分野ごとに考えると話が進まないもので、どの分野に照らしても最低限言えることでまとめている。侃侃諤諤の議論をして絞り込んだものではないので、あくまで「参考指針」ということで、これを使いながらご議論いただければと思う。

それから、3. 態度・志向性 (4) 市民としての社会的責任について、将来像答申のときも「21 世紀型市民」という言葉が出たが、今回の答申にもこの言葉が出てくる。議論の中で印象にあるのは、ヨーロッパやアメリカでは、職業生活とともに、市民としての生活、政治体制、地域社会を自分たちが作っていくという意識が強いが、日本では大学を卒業したらすぐ企業に入って仕事をするという意識が強いということ。これからの日本のことを考えると、自分たちの社会をどう導いていくかという部分を強くする必要があるのでないか。大学を卒業しただけでは集約できない分野や、人間として共同生活を営んでいく上で責任を果たしていくということも、教養教育の中で議論していただければと思う。

- 人だけでなく、大学自体も多様化している中で、専門については比較的差は大きくないが、教養教育についてはかなり違うのではないか。第一分科会の仕事かもしれないが、教養教育についてはどこまでやるかということを考えないといけない。

藤田) 最終的には、大学の進学率・就学率が拡大し多様化している状況を踏まえた現実のフレームワークの中で、大学としてどのような教養教育・共通教育が必要なのかを検討することになる。その際、基本的な枠組みとして伝統的な要素、古典的な素養や、ある意味基礎力と言っていいものと、新しい要素をどのように組み込んでいくのか等は、整理する必要があると思う。

それから、情報リテラシーに関して、ジェネレートする力が充実していないという指摘もあったが、それに加えて、中教審答申でも言われている「市民性」や「市民としての」という点で、日本の場合コミットする力も弱いと思う。「○○力」という表現が流行っているが、その適否はともかく、「創発力」や「コミット力」など、現代的に捉え直され重要だと言われる新たな力について考えることも重要な課題だと思う。

先ほど、国際的な教養人という話があったが、英語で教養を表す単語はない

と思う。日本で言う「教養」育成についての議論では educated person がよく使われているから、educated が教養ということになるとも言えるが、literate は well educated という意味でも使われるから、リテラシーも教養という意味を含んでいる。いずれにしても、その中身や仕組みについて、大学教育として価値あるものとするにはどうすればいいかを検討することが、この分科会の課題になる。

(3) 今後の進め方について

- 本日の議論を基に、役員間で早期に論点メモを作成することとなった。
- 次回の分科会を3月10日(木)10:00から開催することとした。

(4) その他

- 本分科会は「日本の展望委員会」の下に設置されたテーマ別検討分科会「知の創造分科会」(現代市民社会における教養・教養教育－21世紀のリベラル・アーツの創造)を兼ねることとし、委員は両分科会を兼務することとなった。

以上